

書評

## 清水望著『平和革命と宗教』

(冬至書房、2005年)

塩津 徹 (創価大学)

「宗教はアヘンである」というカール・マルクスの言葉を受けて社会主義国家においては宗教を敵視してきた。それは西欧の自由主義国家における国家と宗教との関係とは異質な関係であり、宗教の存在・本質を全く否定するものであった。しかし、社会主義国家の現実の歴史を見るならば、人類の歴史とともに始まる宗教の存在を否定し、人々の心の中から宗教を消し去ることは不可能であったことは明らかである。

著者は国家と宗教との関係についてこれまでも『国家と宗教 — ドイツ国家教会法の再構成とその展開』(早稲田大学出版部、1991年)、『東欧革命と宗教 — 体制転換とキリスト教の復権』(信山社、1997年)を発表してきた。本書はこれらの著作の延長線上にあり、社会主義国家の東ドイツの教会政策に取り上げたものである。特に東ドイツの国家によるキリスト教の福音主義教会への敵視政策に焦点をあてている。

ところで、第二次大戦後のドイツは冷戦下において自由主義国家の西ドイツと社会主義国家の東ドイツに分裂した。前掲の『国家と宗教』は主として西ドイツの国家と宗教の関係を論究したものであるが、本書では東ドイツに眼を転じている。東ドイツは形式的には多党制を採っていたが、実質的には「ブロックシステム」と呼ばれる制度の下、社会主義統一党 (SED) の独裁的支配であり、そのことは国家と宗教との関係にも表れていた。

本書は約700頁に迫る大著であり、二編から構成されている。第一編は、「東ドイツの体制崩壊とドイツ統一」のテーマで、以下、東ドイツの構造原理とナチ体制、東ドイツ憲法下の独裁制、東ドイツ・イデオロギーの特徴、イデオロギー上の要請と政治的現実、両独裁のイデオロギーとテオロギー、東ドイツ福

音主義教会の神学的立場、ナチ体制と東ドイツ教会政策の比較、の各章が立てられている。

これらの章立てを見てもわかるように第一編は「東ドイツの体制崩壊とドイツ統一」のテーマにもかかわらず、むしろ、内容はそこに至るまでの社会主義国家の東ドイツの体制原理、政治構造の特徴を論究したものである。もちろん、第一編の冒頭は、東ドイツ体制崩壊の要因を描き出しているが、崩壊過程を「平和革命」であると総括し、そこでの福音主義教会の役割を高く評価している。

第一編を貫く基調は、東ドイツ社会主義体制の独裁的、権威主義的構造の解明である。自由主義国家においては、宗教の自由など精神的自由を中心とした人権保障によって国家は個人の内面に関与し、統制することは禁止されている。社会主義国家においても憲法上、形式的には宗教の自由は保障されているとはいえ、国家の基本構造そのものが実質的に一党独裁であり、しかも、思想・宗教の精神的領域までも統制しようとする。

著者はこの精神的領域に対する統制に関して国家のイデオロギー・宗教政策の問題として詳細に分析している。そして、東ドイツ社会主義体制のイデオロギー・宗教政策とナチス体制のそれとの共通点を指摘している。ナチス体制もまた政治的独裁だけでなく、「強制的同質化」の言葉で表現されるように上からの価値一元化、国家による思想、イデオロギー統制を行った全体主義であったのである。

第一編の第二章から第五章にわたって社会主義体制とナチス体制との共通点が憲法制度、政治制度からイデオロギー支配の構造まで詳細に分析されているが、特にイデオロギー支配の構造の解明に力点が置かれている。そして、これに対抗する福音主義教会の理念と実践についてナチス体制時から東ドイツ時代まで丹念に追跡されている。ただ、この点に関して社会主義体制とナチス体制の宗教支配の共通点を強調しすぎるとも思えるのであってやはり両体制のイデオロギー上の相違は小さくない。

このような国家のイデオロギー、宗教統制に抵抗する福音主義教会の姿は第二編の「東ドイツ政府の教会政策」でより具体的に論究されている。第二編で

は、以下、社会主義社会の構築、社会主義基盤の強化、SED教会政策の新局面と社会主義憲法、国家・教会関係の限定的接近、78年頂上会談とその影響、国際情勢に対応する教会政策、体制転換期の教会政策、教会政策に新しく求められるもの、という各章が構成されている。

著者は東ドイツ政府の教会政策を歴史的に四つの時期に分けている。それは国家が教会を敵視する「対決」の時期、教会を国家の管理に取り込もうとする「協力」の時期、そして、両者の関係がより緊密な関係を迎える時期であり、最後は再び「対決」の様相を帯びる時期であるが、この第二編では多くの資料を基にかなり詳細かつ実証的な検証がなされている。

社会主義政権が本質的には宗教を敵視しながらも、その抵抗を排除できないとなると一転して政策的には妥協をはかろうとし、結局は対決に至る息詰まるようなプロセスが本書では他には類を見ないほど見事に描かれている。そこには、国家は宗教を、宗教者の心までは統制・管理できない、また、断じてすべきではないという著者の強い思いが込められているように思えるのである。

この著者の思いは東ドイツの崩壊とドイツ統一を平和的にもたらした主要な勢力であったとされる福音主義教会に託されている。本書は全体的にはSEDに対決し、最後には勝利した福音主義教会という構図で描かれているといっても過言ではない。東ドイツの教会政策がテーマであれば、東ドイツの住民の多くが所属する福音主義教会に焦点があたるのは当然ともいえよう。

本書には「東ドイツ社会主義体制に対する福音主義教会」というサブタイトルが付されているのはそのことを表している。確かに東ドイツの社会主義体制の中で労働組合はじめ様々な社会団体がSEDの管理の下に置かれ、自立・自律した団体は福音主義教会しかなく、政府に対抗する主な拠点となったことは事実である。ただ、平和革命後、ドイツ統一後、福音主義教会の活動がどうであったかも関心を持たれることである。

このことは本書の射程外にあることは十分承知の上でドイツの国家と宗教の関係に関心を持つ評者としては、かつてのように抵抗の対象が存在しなくなった現在、ドイツ社会全体を覆う宗教の多元化、キリスト教会離れ、更には世俗化傾向の中で福音主義教会は国家と教会の関係どのように理解し、行動指針を

示しているのか改めて教えを請いたいと考えているのである。